糸島と戦争

恒久平和を願うサイレンの吹鳴

黙とうにご協力を

●8月6日(金)8時15分……広島原爆投下日時
●8月9日(月)11時2分……長崎原爆投下日時
●8月15日(日)12時……終戦の日

今年で終戦から65年。当時、生まれた人も年金の受給年齢になり、戦時のことを知る人も少なくなりました。

市内でも2000人近くの若い命が戦火で失われ、戦争末期には本土決戦に備え、市内に軍事施設も設けられました。戦時下の物資不足の中、当時の市民生活も大変だったようです。

時が経ち、戦争の記憶が薄れ、戦争を知らない世代が大半を占める今だからこそ、過去に発刊された志摩町史や二丈町誌、前原町誌などの資料から、当時の糸島の状況について振り返ってみました。

市内の軍事施設

戦時中、特に戦争末期には、市内に軍事施設が設置され、重要な役割を果たしていました。

●小富士海軍航空隊

旧小富士村(現在の志摩大石から弁天橋付近までの広大な土地)に、鹿児島海軍航空隊小富士分遣隊として飛行場が設置されたのは、昭和19年5月のこと。

昭和18年の暮れに、突如この周辺の土地が買収され、早々に田んぼの埋め立てや造成、兵舎建設が行われました。工事には数百台の荷馬車と数百人の朝鮮の人たちが作業員として家族と共に入村しました。

ここでは、甲種飛行予科練習生の練習基地として、水上特攻要員や空中特攻要員の養成が行われ、加布里での水泳訓練や行軍訓練など、基地周辺でもさまざまな訓練が行われました。

基地は、終戦と同時にその役目を終え、兵員は逐次解員となりました。

●防空監視哨

昭和13年ころ、防空対策として志摩岐志(竹の越)や二丈深江、小呂島に防空監視哨が設営されました。

北九州工業地帯を目標にした玄界灘上空からの敵機の侵入を監視し、敵機の数や侵入経路・時間などを把握し、県防空監視隊本部に報告するのが任務でした。

当初は、在郷軍人や青年団員が哨員に立っていましたが、文部省通達により、青年学校の生徒が勤務するようになりました。

昭和20年6月19日、竹の越防空監視哨の哨員は、福岡大空襲で真っ赤に染まった東の空に浮かぶ可也山の稜線と上空を照らす探照灯を見ました。その直後雷山のふもとに火の手が上がるのを目撃。しばらくすると灰が降ってきたと伝えます。

●小倉兵器補給廠

小富士常駐班

昭和15年ころ(推定)に志摩寺山周辺にガソリンや戦車用樽モービル、大砲、機関銃などの貯蔵施設が設置され、加布里と船越湾には、荷役用の桟橋が設けられました。

昭和16年8月には、高速貨物船天城丸が戦車用樽モービルを積み、船越湾に入港しています。これらの戦時物資は、軍用トラックや荷馬車で前原駅まで運び、貨車でそれぞれの戦地に運ばれました。

昭和20年になると、空襲の危機が高まり、倉庫に貯蔵されていた燃料などは壕を掘り、地中に保管されるようになり、本土決戦の危機が高まると、瀬高町(現みやま市)に移転されました。

●第六三四海軍航空隊玄界(小富士水上)基地

これは昭和20年5月、志摩船越・久家地区に設置された基地で、水上機の最大の秘匿海軍航空基地。

ここは、沖縄方面の敵艦船夜間攻撃への全力出撃に引き続き、本土決戦に備える最後の決戦基地でした。

軍は、水上雷撃隊を増強し、兵舎や幕舎、病舎など、基地の機能として必要な施設を、学校や寺院、民家を活用しながらこの地に集中させ、兵器や機材も集積させました。

燃料はドラム缶ごと砂地に埋め、船越山など周辺に19基の対空防備の機銃陣地を設営しました。また可也山に弾薬壕も掘られました。

ここでは、湾内に浮かべた標的への「瑞雲機」による夜間の急降下爆撃訓練やロケット砲の発射訓練が行われ、戦闘機が海面に激突する事故もあったようです。

玄界基地からは、比(フィリピン)島航空戦に延べ30機、沖縄航空戦には延べ265機が出撃。特に沖縄戦では、短期間に集中して出撃し、その役割は重要でした。

これら基地に関する資料は、終戦と同時に焼却処分されており、詳しい内容はよく分かっていません。

戦争と市民生活

●演習と動員

戦争の長期化に伴って、市民生活も戦時色が次第に色濃くなってきました。

昭和11年9月から10月にかけて、西部防衛司令部の防空演習が実施され、当時の桜井村から防衛団として延べ1100人の村民が動員。

糸島中学校(現在の糸島高校)でも、防空演習が行われ、昭和13年度からは、制服が国防色に、また制帽も戦闘帽型になりました。

また各地域では、銃後組織や女子青年義勇隊などが組織され、軍国意識の高揚が図られていきました。

●物資と労働力不足

生活の簡素化が求められ、昭和13年ごろから、作業着にモンペを着用する女性が増えていき、全員が着用するようになりました。

物資や労働力不足が深刻化し、昭和12年には食料品が前年比で2割上昇(福岡市公設市場)。昭和13年からは、綿糸をはじめ、さまざまな物資が順次、配給制へと移行していきました。

農家は米穀の供出を強いられ、必要以上の持ち米(自家消費米)を禁止されました。また女性の労働力の活用が奨励され、昭和13年には、旧芥屋村で女性を対象とした牛馬耕講習会が開催されました。さらに小学生までをも巻き込んだ食料増産活動が展開されていきました。

●基地と市民生活

民家を兵舎として使った玄界基地では、住民と兵士たちが混住し、両者の間に密接な関係も生まれました。

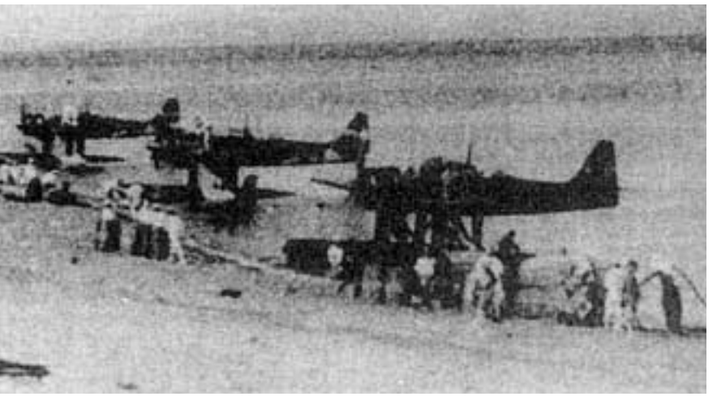
パラシュートをたたむのを地元婦人会が手伝ったり、同居する戦闘機の搭乗員の服に日の丸を縫いつけたり、沖縄戦の帰還兵が土産に黒砂糖を差し入れるなどの交流も見られました。

また、沖縄夜間攻撃など、大きな出撃があるときは、基地の砂浜に地元の人たちが大勢集まり、出撃を見送ったりしていました。

そのほか、隊員から漁労班を編成し、漁船の燃料は軍が提供する形で地元漁師と漁を行い、捕った魚を折半するなどしていました。

漁業関係者との繋がりは深く、着水に失敗し、転覆した飛行機を、漁船が助けに行き、引き上げを手伝うこともありました。

当時、玄界基地で訓練をしていた若者たち
この航空隊では、水上特攻要員や空中特攻要員の養成が行われていた



玄界基地からは、比(フィリピン)島戦や沖縄戦に多数の戦闘機が出撃した